

庭上の一寒梅 笑うて風雪を侵して開く

争わず又力めず 自ら占む百花の魁さきがけ

平松讓二（女子中学校・高等学校教諭）

新島襄のふるさと安中は梅の産地である。梅の季節になると、周辺の山一面に薄いピンクの花びらを付けた梅の花がみごとに広がる。冬の安中の寒さは厳しく、空っ風と呼ばれる、時に人が歩くのも困難なほどの暴風が吹き荒れる。その空っ風が吹き荒れる冷たい寒さの中で、安中の梅は花を咲かせる。その姿は見事である。新島は、冬の厳しい風や雪をしのいで、どの花よりも一番先に咲いた梅を「寒梅」と称し、その寒梅を愛した。

新島が詠んだ「寒梅の詩」は次のように解釈することが出来るだろう。

庭先の一本の梅の木、寒梅とも呼ぼうか。厳しい風に耐え、冷たい雪を忍び、笑っているかの様に、平然と咲いている。別に、誰かと争って、無理に一番咲きを競って努力したのでもなく、自然にあらゆる花のさきがけとなったのである。まことに謙虚な姿で、人間もこの寒梅のようにありたいものだ。

まさに、新島自身の体験や思いを寒梅にたとえた詩である。キリスト教に対する排斥運動の中で、京都に同志社を設立し、さまざまな困難に立ち向かいながらその歩みを始めたのである。新島はその苦節苦難、試練に耐えながらも、争わず、無理をせず、終始ゆとりを持ち自然体で、キリスト教主義同志社で学ぶ学生たちに日本の将来を託すという壮大な夢にかけた。まさに、近代日本の先覚者、牧師として、キリストの福音の種を同志社で学ぶ若者たちに蒔き続けたのである。

庭上一寒梅
笑侵風雪開
不爭又不力
自占百花魁

（新島襄が大磯で療養中に詠んだとされる漢詩。直筆は存在しない）